

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝刊
35卷

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
35卷

現代短歌分類辞典

新装版 35 卷

通卷 1 9 3

平成六年 三月 十一日発行	定價一六、七〇〇円
著者発行 兼印刷者	津 端 亨
発行所	現代短歌分類辞典刊行所
	代表 津 端 亨
〒345	埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五
	電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番
	振替 東京三一九三一二四

4-87706-193-2

目次

目次

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
とうげ〔峠〕	三八〇	一	とうこう〔登校〕	一三	一九	とうさん〔父さん〕	二二	二四
とうけ〔道化〕	二二	一〇	とうこう〔同好〕	一	一九	とうざん〔当山〕	一	二五
とうけい〔統計〕	五	二一	とうこう〔動向〕	四	二〇	とうさん〔倒産〕	七	二五
とうけい〔闘鶏〕	二	二一	とうこう〔銅鉦〕	一	二〇	とうし〔唐詩〕	二	二五
とうけい〔陶芸〕	一	二一	とうこう〔瞳孔〕	七	二〇	とうし〔闘士〕	七	二五
とうけい〔同系〕	一	二一	とうこう〔同行〕	一一	二〇	とうし〔闘志〕	一〇	二五
とうけい〔同型〕	四	二一	どうかうくわい〔同好会〕	一	二〇	とうし〔凍死〕	七	二六
とうけい〔同慶〕	一	二二	とうこうき〔投光機〕	二	二二	とうし〔投資〕	二	二六
とうけい〔憧憬〕	一三	二二	とうこうき〔投光器〕	三	二二	とうし〔透視〕	二	二六
とうけいじ〔東慶寺〕	一	二二	とうがうせいじ〔東郷青児〕	一	二二	とうじ〔冬至〕	七四	二六
とうけし〔道化師〕	七	二二	とうごく〔東国〕	八	二二	とうじ〔当時〕	五	二八
とうげちや〔峠茶屋〕	七	二二	とうこく〔慟哭〕	六	二二	とうじ〔答辭〕	三	二八
とうけつ〔凍結〕	五	二三	とうこつ〔頭骨〕	二	二二	とうじ〔湯治〕	一五	二九
とうけつ〔洞穴〕〔ほらあな〕	一四	二三	とうごま〔唐胡麻〕	一	二二	とうし〔同志〕	三九	二九
とうげみち〔峠道・峠路〕	一三九	二三	とうこん〔唐魂〕	一	二三	とうじ〔導師〕	一	三〇
とうけん〔刀剣〕	一	二七	とうこん〔刀痕〕	二	二三	とうじ〔童子〕	一三九	三〇
とうげん〔凍原〕	二	二七	とうさ〔動作〕	四三	二三	とうじ〔東寺〕	九	三四
とうげん〔桃源〕	三	二七	とうさい〔搭載〕	一	二三	とうじ〔道士〕	九	三四
とうげん〔洞見〕	一	二七	とうざい〔東西〕	一三	二三	とうじいん〔等持院〕	一	三五
とうげん〔道元〕	八	二七	とうざい〔同罪〕	一	二三	とうじしゃ〔当事者〕	三	三五
とうげんざか〔道玄坂〕	六	二七	とうざいなんぼく〔東西南北〕	一	二四	とうしせん〔唐詩選〕	二	三五
とうこう〔灯光〕	三七	二八	とうさく〔盜作〕	一	二四	とうじつ〔当日〕	二	三五
とうこう〔陶工〕	一三	一九	どうさつ〔洞察〕	二	二四	どうしつ〔同室〕	七	三五

どうして〔どうして〕	一八	三五	どうしょう〔同床〕	一	四四	どうすいかん〔導水管〕	二	四九
どうしても〔どうしても〕	二六	三六	どうじょうしん〔同情心〕	一	四四	とうすみとんぼ〔燈心蜻蛉〕	二	四九
とうじばい〔冬至梅〕	三	三七	とうしょうだいじ〔唐招提寺〕	二〇	四四	とうすう〔頭数〕〔あたまかず〕	一	五〇
どうじに〔同時に〕	五	三七	どうじょうやぶり〔道場破り〕	一	四五	とうずる〔投ずる〕	三	五〇
どうじま〔堂島〕	二	三八	どうしよく〔同職〕	一	四五	どうずる〔動ずる〕	二	五〇
どうしや〔同車〕	六	三八	どうしよく〔銅色〕	五	四五	どうせ〔どうせ〕	八	五〇
どうしや〔道者〕	七	三八	とうじる〔投じる〕	一	四五	とうせい〔当世〕	一	五〇
とうしやし〔謄写誌〕	一	三八	とうしろ〔藤四郎〕	三	四五	とうせい〔党勢〕	一	五〇
どうししやだいがく〔同志社大学〕	一	三八	とうしん〔刀身〕	三	四五	とうせい〔統制〕	二〇	五〇
とうしゅ〔当主〕	三	三八	とうしん〔灯心〕	一	四六	とうせい〔陶製〕	二	五一
とうしゅ〔投手〕	四	三八	とうしん〔等身〕	一	四六	どうせい〔同性〕	二	五一
とうしゅ〔党首〕	一	三九	とうしん〔盗心〕	二	四六	どうせい〔動静〕	一	五一
とうしゅ〔同種〕	一	三九	とうじん〔唐人〕	九	四六	どうせい〔同棲〕	五	五一
とうじゅ〔冬至湯〕	二	三九	とうじん〔蕩尽〕	一	四六	どうせい〔同僚〕	一	五一
どうしう〔同舟〕	一	三九	どうしん〔同心〕	五	四六	どうせい〔銅製〕	一	五一
どうしゅく〔同宿〕	三	三九	どうしん〔童心〕	二三	四六	どうせいあい〔同性愛〕	一	五二
とうしよ〔当初〕	一	三九	どうしん〔道心〕	九	四七	とうせいふう〔当世風〕	一	五二
とうしよ〔島嶼〕	一	三九	どうじん〔同人〕	二	四七	とうせき〔投石〕	二	五二
とうしよ〔投書〕	四	三九	とうじん〔島人〕〔しまびと〕	三一	四八	どうせき〔同席〕	一	五二
どうじよ〔童女〕	二三	三九	とうしん〔灯心〕	一	四八	とうせん〔当選〕	八	五二
とうしよ〔刀匠〕	一	四三	とうじんおきち〔唐人お吉〕	一	四九	とうせん〔盗泉〕	一	五二
とうしよ〔凍傷〕	一五	四三	どうじんざっし〔同人雑誌〕	一	四九	とうせん〔登仙〕	一	五三
とうじよ〔登場〕	三	四三	とうしんだい〔等身大〕	二	四九	とうぜん〔東漸〕	三	五三
とうじよ〔道場〕	一四	四三	とうじんぼう〔東尋坊〕	三	四九	たうぜん〔当然〕	一七	五三
どうじよ〔同乗〕	三	四四	とうじんやしき〔唐人屋敷〕	一	四九	とうぜん〔陶然〕	三	五三
どうじよ〔同情〕	一二	四四	とうすい〔陶酔〕	七	四九	どうせん〔銅線〕	二	五三

どうせん〔同船〕	二	五四	とうちゃく〔到着〕	二	六七	とうとう〔等等〕	六	七二
どうせん〔銅銭〕	六	五四	とうちゃん〔父ちゃん〕	五	六七	とうとう〔東塔〕	八	七三
どうぞ〔どうぞ〕	一	五四	とうちゅう〔道中〕	一	六七	とうとう〔堂塔〕	一七	七三
とうそう〔逃走〕	一	五四	とうちよう〔登頂〕	一	六七	どうとう〔堂堂〕	八	七三
とうそう〔闘争〕	三六	五四	どうちよう〔同調〕	一	六七	どうとく〔道德〕	五	七三
どうそう〔同窓〕	六	五五	どうちよう〔道庁〕	二	六七	どうとくてき〔道德的〕	一	七四
どうぞう〔銅像〕	二九	五五	とうちよく〔当直〕	一	六八	とうとつ〔唐突〕	四〇	七四
どうそうかい〔同窓会〕	五	五六	とうちん〔陶枕〕	三	六八	とうとぶ〔貴ぶ〕	一一	七五
とうぞく〔盗賊〕	六	五六	とうつう〔疼痛〕	八	六八	とうとぶ〔尊ぶ〕	二〇	七五
どうぞく〔同族〕	八	五七	とうてい〔到底〕	一	六八	とうどり〔頭取〕	二	七六
だうそじん〔道祖神〕	一四	五七	どうてい〔童貞〕	六	六八	どうとんぼり〔道頓堀〕	一六	七六
とうそつ〔統率〕	一	五七	どうてい〔道程〕	七	六八	とうな〔唐菜〕	三	七六
とうた〔淘汰〕	二	五七	どうていこ〔洞庭湖〕	一	六九	とうなが〔胴長〕	三	七七
とうだい〔当代〕	一	五七	とうてき〔投擲〕	一	六九	とうなす〔唐茄子〕	一四	七七
とうだい〔灯台〕	一六一	五八	どうてき〔動的〕	二	六九	どうなりと	二	七七
とうだい〔東大〕	五	六二	どうでも〔どうでも〕	二	六九	とうなん〔東南〕	一〇	七七
どうたい〔胴体〕	一三	六二	とうてん〔東天〕	三	七〇	とうなん〔盗難〕	六	七八
とうだいぐさ〔灯台草〕	一	六二	どうてん〔同点〕	二	七〇	とうにか	一〇	七八
とうだいじ〔東大寺〕	二〇	六二	とうでん〔盗電〕	一	七〇	どうにも	三〇	七八
とうだいもり〔灯台守〕	八	六三	どうでん〔動顛〕	一	七〇	どうにゅう〔導入〕	一	八〇
どうたく〔銅鐸〕	五	六三	とうど〔凍土〕	二	七〇	どうにゅう〔糖尿〕	六	八〇
どうだん〔満天星〕	八七	六四	とうど〔唐土〕	三	七一	とうにょうびよう〔糖尿病〕	三	八〇
どうだんつつじ〔満天星つつじ〕	四	六六	とうど〔陶土〕	二四	七一	どうねん〔同年〕	六	八〇
とうち〔統治〕	三	六六	とおと〔遠音〕	一	七一	どうのま〔胴の間〕	七	八〇
どうち〔動地〕	一	六六	とうとい〔尊い〕	三	七一	とうは〔党派〕	四	八〇
とうちけん〔統治権〕	一	六七	とうとう〔滔滔〕	二	七二	とうば〔塔婆〕	三	八一

とうはい〔同輩〕	二	八二	とうふくじ〔東福寺〕	二	九〇	とうみょう〔灯明〕	三九	九八
とうはつ〔頭髮〕	一七	八二	どうぶつ〔動物〕	五〇	九〇	どうみょうじ〔道明寺〕	一	九九
とうばつ〔討伐〕	七	八二	どうぶつえん〔動物園〕	四九	九一	とうみん〔冬眠〕	三六	一〇〇
とうばつ〔盗伐〕	一	八三	どうぶつしつ〔動物質〕	一	九二	とうめい〔東名〕	二一〇	一
どうばら〔胴腹〕	四	八三	どうぶつせい〔動物性〕	一	九三	とうめい〔透明〕	七二	一〇一
とうはん〔登攀〕	一	八三	どうぶつてき〔動物的〕	一	九三	どうめい〔同名〕	三一〇	三
とうばん〔当番〕	七	八三	とうふや〔豆腐屋〕	一五	九三	どうめい〔同盟〕	九一〇	三
どうはん〔同伴〕	三	八三	とうぶん〔糖分〕	一	九三	とうめいさ〔透明さ〕	二一〇	三
どうばん〔銅板・銅版〕	四	八三	とうぶん〔等分〕	一	九三	とうめいたい〔透明体〕	二一〇	三
どうばんが〔銅板画〕	一	八三	とうぶん〔当分〕	三	九三	とうめいど〔透明度〕	三一〇	三
どうばんがしゅう〔銅版画集〕	一	八三	どうぶん〔同文〕	一	九四	とうめいな〔透明な〕	二八	一〇三
とうひ〔唐檜〕	三	八四	とうへき〔盜癖〕	一	九四	とうめん〔当面〕	三一〇	四
とうひ〔逃避〕	一五	八四	とうべん〔答弁〕	五	九四	どうも〔どうも〕	六一〇	四
どうひつ〔同筆〕	一	八四	とうほう〔東方〕	一五	九四	とうもく〔頭目〕	五一〇	五
とうひょう〔投票〕	一三	八四	とうぼう〔逃亡〕	一三	九四	どうもく〔瞳目〕	一一〇	五
とうびょう〔投鉋〕	一	八五	どうほう〔同胞〕	五四	九五	どうもり〔堂守〕	六一〇	五
とうびょう〔闘病〕	一三	八五	とうほく〔東北〕	二四	九六	とうもろこし〔玉蜀黍〕	六九	一〇五
とうひょう〔道標〕	一一	八五	とうぼく〔倒木〕	二二	九七	どうもん〔同門〕	二一〇	七
どうびょう〔同病〕	一	八六	とうぼく〔唐木〕	一	九七	どうもん〔洞門〕	二九	一〇七
とうひょうじょう〔投票場〕	二	八六	とうほくせん〔東北線〕	三	九七	とうや〔洞爺〕	五一〇	八
とうひょうもり〔灯標守〕	一	八六	とうほくべん〔東北弁〕	一	九八	とうや〔当夜〕	一一〇	八
とうひん〔盗品〕	一	八六	とうほん〔膳本〕	二	九八	とうやく〔当薬〕	七一〇	八
とうふ〔豆腐〕	五八	八六	とうほんせいそう〔東奔西走〕	一	九八	とうやく〔湯薬〕	一一〇	八
とうぶ〔頭部〕	五	八八	とうにんどう〔唐忍冬〕	二	九八	とうやくりんどう	三一〇	八
とうぶ〔賜ぶ・給ぶ〕	二〇	八八	とうみつ〔糖蜜〕	一	九八	とうやく〔洞爺湖〕	一一〇	九
とうふう〔東風〕	四一	八八	どうみゃく〔動脈〕	三	九八	とうやま〔遠山〕	一一〇	九

どうやら〔どうやら〕	四一〇九	どうれいじ〔同令児〕	一一一六	とおじろし	五二四七
とうゆ〔灯油〕	一一〇九	どうろ〔道路〕	一二三 一一六	とおす〔透す〕	五七二四七
とうゆ〔桐油〕	二一〇九	とうろう〔灯籠・灯笼〕	一六六 一一九	とおすと〔トースト〕	三二四九
とうよう〔東洋〕	三二〇九	とうろう〔蠟燭〕	九二 一二四	とおだのかはづ〔遠田蛙〕	四二四九
とうよう〔登用〕	一一二〇	とうろうながし〔灯笼流し〕	一一二六	とおちか〔トーチカ〕	二三二四九
どうよう〔童謡〕	七二二〇	とうろく〔登録〕	二二二六	とおつ〔遠つ〕	五六二五〇
どうよう〔動揺〕	三三二二〇	とうろん〔討論〕	三二二六	とおつあふみ〔遠つ海〕	二五二五一
とうようかんじ〔当用漢字〕	三二二一	どうわ〔童話〕	三二二六	とおたうみ〔遠江〕	九二五二
とうようじん〔東洋人〕	二二二二	とうわく〔当惑〕	一一二七	とおつおや〔遠つ祖〕	二二二五二
とうらい〔到来〕	四二二二	とえい〔都営〕	一一二七	とおつかみ〔遠つ神〕	二二五三
とうらい〔当来〕	八二二二	とおあさ〔遠浅〕	一三二二八	とおつくに〔遠つ国〕	五二五三
とうらく〔当落〕	一一二二	とおい〔遠い〕	七一 一二八	とおつよ〔遠つ世・遠つ代〕	六六二五三
とうらく〔騰落〕	一一二二	とおいかずち〔遠雷〕	一一三〇	とおつびと〔遠つ人〕	一二二五五
どうらく〔道楽〕	五二二二	とほいる	一一三〇	とおつみおや〔遠つみ祖〕	一三二五六
どうらん〔動乱〕	二七一三	とおう〔渡欧〕	一一三〇	とおつおや〔遠つ親〕	四二五六
とうり〔桃李〕	四二二三	とおからず〔遠からず〕	二〇 一三〇	とおづま〔遠夫〕	一二五六
どうり〔道理〕	一五二四	とおかわず〔遠蛙〕	一七 一三二	とおで〔遠出〕	四二五六
とうりつ〔倒立〕	一一二四	とおき〔遠き〕	一六〇 一三二	とおどおしい〔遠遠しい〕	一一五六
とうりゅう〔逗留〕	二二二四	とおきい〔トーチキー〕	五 一七三	どおなつ〔ドーナツ〕	二二五七
とうりょう〔棟梁〕	三二二四	とおく〔遠く〕	二五五三 一七三	とおなり〔遠鳴り〕	一〇二五七
とうりょう〔頭領〕	二二二四	とおぐも〔遠雲〕	一〇 二四一	とおに〔遠に〕	一一五七
どうりょう〔同僚〕	二八二五	とおさかる〔遠さかる〕	七四 二四一	とおね〔遠音〕	五〇二五七
どうりょく〔動力〕	八二二五	どおし〔同志〕	三九 二四三	とおの〔遠野〕	二五二五八
とうるい〔糖類〕	一一二六	どおし〔同士〕	五 二四五	とおのく〔遠退く〕	一二二五九
どうるい〔同類〕	三二二六	どおし〔道志〕	三二四五	とおのける〔遠退ける〕	二二六〇
とうれい〔答礼〕	一一二六	とおす〔通す〕	七五 二四五	とおのながめ〔遠眺〕	一二六〇

とおのり〔遠乗り〕	一 二六〇	とほりま〔通り魔〕	五 二八〇	とかちの〔十勝野〕	五 三二六
どおばあ〔ドーバー〕	二 二六〇	とおりみち〔通り道〕	一 二八〇	とかちみね〔十勝嶺〕	二 三二六
とおび〔遠火〕	二 二六〇	とおる〔通る〕	三八五 二八一	とかちへいや〔十勝平野〕	三 三二六
とおかじ〔遠火事〕	八 二六〇	とおる〔透る〕	二三五 二九一	とかちやま〔十勝山〕	一 三二六
とおひがた〔遠干潟〕	二 二六〇	とおる〔徹る〕	一三九 二九七	どかどか〔どかどか〕	四 三二六
とおびと〔遠人〕	三三 二六〇	とか〔都下〕	一 三〇一	とがにん〔科人〕	一 三二六
とおもへや	一 二六一	とか〔渡河〕	二一 三〇一	とがのを〔柁尾〕	三 三二七
とおまき〔遠巻き〕	三 二六一	とか〔各科〕	一七 三〇一	とかま〔利鎌〕	二六 三二七
とおます〔トオマス〕	一 二六一	とが〔柁〕	一四 三〇一	どがま〔土釜〕	二 三二七
とおまつかぜ〔遠松風〕	三 二六二	とかい〔都会〕	八三 三〇五	とがめ〔咎め〕	九八 三二八
とおみ〔遠見〕	四六 二六二	とかい〔渡海〕	二 三〇七	とがらす〔尖らす〕	二 三三〇
とおみち〔遠道〕	一 二六三	どかい〔土塊〕	二五 三〇七	とがり〔尖り〕	一三四 三三〇
とおみみ〔遠耳〕	二 二六三	とかく〔兎角〕	三三 三〇八	とがり〔鳥狩〕	三 三三四
どおむ〔ドーム〕	一八 二六三	とかくし〔戸隠〕	三三 三〇九	とがりなみ〔尖り波〕	四 三四
とおめ〔遠目〕	二九 二六四	とかくしやま〔戸隠山〕	二四 三二〇	とがる〔尖る〕	四八 三四
とおめがね〔遠眼鏡〕	九 二六四	とかげ〔蜥蜴〕	一〇三 三三一	どかん〔土管〕	二〇 三三六
とおやま〔遠山〕	三五三 二六五	とかげ〔常陰〕	一五 三三三	とき〔時〕	一五五 三三六
とおよ〔遠世〕	五九 二七四	とかす〔梳かす〕	二 三三四	とき〔稿・朱鷺〕	一二 三三〇
とおらす〔通らす〕	五 二七五	とかす〔溶かす〕	七 三三四	とき〔関〕	八 三三一
どおらん〔ドールン〕	二 二七六	とかす〔解かす〕	四 三三四	どき〔土器〕	三五 三三一
どおり〔通り〕	一一六 二七六	とかす〔焙かす〕	四 三三四	どき〔怒気〕	二 三三一
とおりあめ〔通り雨〕	三六 二七九	どかた〔土方〕	四 三三五	とぎ〔都議〕	一 三三一
とおりかぜ〔通り風〕	二 二八〇	とかち〔十勝〕	二〇 三三五	ときあかり〔時明かり〕	二 三三一
とおりすがる〔通過〕	一 二八〇	とかちがわ〔十勝川〕	二 三三五	ときいろ〔鶉色〕	一 三三一
とおりすがり〔通りすがり〕	一〇 二八〇	とかちたいら〔十勝平〕	二 三三五	ときおり〔時折〕	一〇〇 三三三
とおりすぎる〔通り過ぎる〕	二 二八〇	とかちだけ〔十勝岳〕	五 三三六	ときかね〔時鐘〕	四 三三五

とききぬ〔解き衣〕	一 三三六	ときはかきは〔常磐堅磐〕	五 三六七	とく〔説く〕	一四〇 三八〇
ときぐもり〔時曇〕	一 三三六	ときはなつ〔解き放つ〕	一 三六八	とく〔疾く〕	七三 三八四
ときじく〔時じく〕	九四 三三六	ときほぐす〔解きほぐす〕	一 三六八	とく〔融く〕	一二 三八六
ときしも〔時しも〕	二一 三三八	どきまぎ	二 三六八	とぐ〔研ぐ・磨ぐ〕	八三 三八六
ときしもあれ	一 三三九	とぎみず〔研ぎ水〕	九 三六八	どく〔毒〕	七〇 三八九
とぎすます〔研ぎ澄ます〕	二 三三九	ときめき〔ときめき〕	一 三六八	とくい〔得意〕	一二 三九一
ときぜんまろ〔土岐善麿〕	六 三三九	ときめかす〔ときめかす〕	一 三六八	とくい〔特異〕	三 三九一
ときそう〔稿草〕	二 三三九	ときめく〔ときめく〕	四七 三六八	とくいな〔特異な〕	一 三九一
とぎだす〔研ぎ出す〕	二 三四〇	ときやみあめ〔時止雨〕	一 三七〇	どぐう〔土偶〕	一二 三九一
とぎたて〔研立〕	一 三四〇	どきゅうかん〔弩級艦〕	一 三七〇	とくいげ〔得意気〕	五 三九一
ときたま〔時偶〕	三八 三四〇	ときよ〔時世〕	二 三七〇	どくうつぎ〔毒空木〕	二 三九一
どぎつく	二 三四一	とぎよ〔渡御〕	四 三七〇	どくえき〔毒液〕	一 三九一
どきっと	一 三四一	どきょう〔度胸〕	三 三七〇	どくが〔毒蛾〕	四 三九一
ときどき〔時々〕	一六三 三四一	どきょう〔読経〕	三九 三七一	どくがく〔独学〕	二 三九一
どきどき〔どきどき〕	三 三四六	とぎれとぎれ〔途切れ途切れ〕	二 三七二	どくがす〔毒ガス〕	一 三九一
ときとして〔時として〕	四五 三四六	とぎれる〔途切れる〕	二 三七二	どくがすますく〔毒ガスマスク〕	一 三九三
ときなく〔時なく〕	一 三四七	ときわぎ〔常磐木〕	七七 三七二	とくぎ〔特技〕	三 三九三
ときならぬ〔時ならぬ〕	三三 三四七	ときわかず〔時不分〕	一 三七四	どくきのこ〔毒茸〕	五 三九三
ときなるひと〔時なる人〕	一 三四八	ときわこうえん〔常磐公園〕	一 三七四	どくぎん〔独吟〕	一 三九三
ときに〔時に〕	三二八 三四八	ときわず〔常磐津〕	二 三七四	どくけ〔毒気〕	五 三九三
ときには〔時には〕	六一 三五七	ときわまんさく〔常磐満作〕	一 三七四	どくご〔独語〕	一九 三九三
ときのうん〔時の運〕	一 三五九	とぎん〔鍍金〕	五 三七五	とくさ〔木賊・砥草〕	七七 三九四
ときのきねんび〔時の記念日〕	一 三五九	とく〔徳〕	一六 三七五	とくさい〔贖罪〕	七 三九六
ときのこえ〔関の声〕	六 三五九	とく〔梳く〕〔そく〕	三二 三七五	どくさい〔独裁〕	四 三九六
ときのひと〔時の人〕	二 三五九	とく〔溶く〕	二七 三七六	どくさつ〔毒殺〕	四 三九六
ときのま〔時の間〕	二八九 三五九	とく〔解く〕	九四 三七七	とくし〔特使〕	一 三九六

どくじ〔独自〕	一 三九七	どくたあ〔ドクタ〕	一 四〇一	どくふ〔毒婦〕	二 四〇九
どくしつ〔得失〕	四 三九七	どくたけ〔毒茸〕	五 四〇二	どくふ〔読譜〕	一 四〇九
どくしま〔徳島〕	八 三九七	どくだみ〔どくだみ〕	六 一四〇二	どくぶつ〔毒物〕	一 四〇九
どくしゃ〔読者〕	二 三九七	どくだん〔独断〕	四 四〇四	どくぶん〔独文〕	一 四〇九
どくじゃ〔毒蛇〕	三 三九七	どくだんせんこう〔独断専行〕	一 四〇四	とくべつ〔特別〕	八 四〇九
どくしゃく〔独酌〕	二 三九七	とぐち〔戸口〕	六 五 四〇四	どくへび〔毒蛇〕	三 四〇九
どくしゅ〔特殊〕	六 三九七	とくちよう〔特徴〕	三 四〇六	とくほう〔特報〕	三 四〇九
とくじゅ〔特需〕	一 三九八	とくてい〔特定〕	二 四〇六	とくぼう〔徳望〕	一 四一〇
どくしゅ〔毒酒〕	二 三九八	とくてん〔得点〕	二 四〇六	どくぼう〔独房〕	二 四一〇
どくしゅう〔独習〕	一 三九八	とくど〔得度〕	四 四〇六	とくほん〔読本〕	八 四一〇
どくしょ〔読書〕	三 五 三九八	とくとう〔禿頭〕	五 四〇六	どくみ〔毒味〕	四 四一〇
どくしょう〔独唱〕	三 三九九	とくとく〔とくとく〕	一 七 四〇六	とくむへい〔特務兵〕	一 三 四一一
どくしょう〔読誦〕	二 三九九	とくとく〔得々〕	二 四〇七	どくむし〔毒虫〕	一 四一一
とくしよく〔特色〕	四 三九九	とくとく〔疾く疾く〕	二 四〇七	とくめい〔匿名〕	一 四一一
どくしん〔独身〕	二〇 三九九	どくとく〔独特〕	二 四〇七	とくめい〔特命全權公使〕	一 四一一
どくする〔毒する〕	一 四〇〇	どくどくしい〔毒々しい〕	二 四〇七	どくや〔毒矢〕	三 四一一
とくせい〔特性〕	一 四〇〇	どくとくな〔独特な〕	一 四〇七	どくやく〔毒薬〕	七 四一一
どくせい〔毒性〕	三 四〇〇	とくとみそほう〔徳富蘇峰〕	一 四〇七	とくゆう〔特有〕	五 四一二
どくぜつ〔毒舌〕	三 四〇〇	とくとみろか〔徳富蘆花〕	一 四〇七	とくり〔徳利〕	二 四一二
どくせり〔毒芹〕	一 四〇〇	どくとる〔ドクトル〕	四 四〇八	どくりつ〔独立〕	三 三 四一三
どくせん〔独占〕	四 四〇〇	どくにんじん〔毒人参〕	一 四〇八	どくりつこく〔独立国〕	一 四一四
どくぜん〔独善〕	四 四〇一	とくのうか〔篤農家〕	二 四〇八	どくりつじそん〔独立自尊〕	一 四一四
どくそう〔毒草〕	二 四〇一	とくはい〔特配〕	二 四〇八	どくりつせんげん〔独立宣言〕	一 四一四
どくそう〔独走〕	一 四〇一	とくばい〔特売〕	四 四〇八	どくりよう〔読了〕	二 四一四
とくそく〔督促〕	五 四〇一	とくはいん〔特派員〕	一 四〇八	とくれい〔督励〕	一 四一四
とくそくじよう〔督促状〕	一 四〇一	とくひつ〔禿筆〕	三 四〇九	とぐろ〔とぐろ〕	六 四一四

どくろ〔髑髏〕	二五	四一四
とげ〔棘〕	一〇五	四一五
どけ〔土気〕	一	四一八
とけあう〔解け合う〕	五	四一八
とけい〔時計〕	三三六	四一八
とけいそう〔時計草〕	一	四二八
とけいだい〔時計台〕	一六	四二八
とけこむ〔溶け込む・融け込む〕	二	四二八
どげざ〔土下座〕	二	四二八
どけち〔どけち〕	一	四二八
とけつ〔吐血〕	七	四二九
とげつけう〔渡月橋〕	四	四二九
とげつほう〔吐月峰〕	三	四二九
とげとげと〔刺刺と〕	二三	四二九
とげとげしい〔刺々しい〕	一三	四三〇
とげとげしさ〔刺刺しさ〕	三	四三〇
とげなしあかしあ〔トゲナシアカシア〕	一	四三一
とける〔溶ける〕	一〇	四三一
とける〔解ける〕	四	四三一
とける〔融ける〕	一	四三一
とげる〔研げる〕	三	四三一
とげる〔遂げる〕	一	四三一
どけん〔土建〕	三	四三二
どけんや〔土建屋〕	一	四三二
とこ〔床〕	一〇六〇	四三二
計	一五六	四九四
首	一五六	四九四

とうげ【名詞】「続き」

赤々とわたるあらしに船原の峠を孤り下るひとあり②

あかつきの雲谷峠より召されたる軍馬にあらむ嘶き聞こゆ

(支那事変後)

あかつきの峠の霧にほそぼそと青きトマトのにはひながるる①

赤土のみに車を乗り捨ててのぼる峠の草の露はも⑪

あかときの峠の駅に水のめり越え来し山々霧こめむとす

赤名峠のわらび折り持ちこの町に來り宿りしは十二年前か

あかねさす夕焼雲にうちむかひ碓氷の峠下らむとする

秋雨とおもほゆるまで降りつぎし山の峠に寒蟬きこゆ(白き山)

秋草の峠の花にかぜたえずげんのしようこはかなしくゆらく⑤

(新万葉集二)

秋草の峠の道にきこえ居る雲雀はひとつ八月の日に

秋雨のはれし峠に日は暑く馬糞を嘗むる黒き虫あり③

秋立ちてのちいくばくぞあぢきなく尾花^{なは}長たり尾花の峠⑦

秋の海ひらけて青し峠より咲きつづきたるをみなへしの上に①

秋日ざし峠の茶屋の寛水小鳥に飲ませわれも飲みけり

浅貝の部落ひらく寄りあひて峠のしたにはろびゆきたり

朝霧のふかき峠の草を踏む靴下あかき処女がひとり⑧

朝立ちて夕まけくだる峠下夜につづきてふる雨の道

朝つゆに濡れたる草は母子草の花わが駒は食む峠のみに

朝登る峠のみに岩裂をとりては噛みぬその渋き実を⑧

鹿兒島 壽藏

近藤 羅漢柏

宮沢 賢治

尾上 柴舟

古泉 千櫨

土屋 文明

長沢 美津

斎藤 茂吉

今井 邦子

土屋 文明

結城 哀草果

與謝野 晶子

金子 元臣

若林 牧春

遠山 繁夫

松村 英一

釈 遼空

三 苦京子

川田 順

足柄の峠はどこか篠原を首をのばして馬のぼり来る

足弱の妹らをあんじけふ越えむ山の峠をうち仰ぎたり(地懐以後)

あす越えむ峠は二つ雷雲のわきて消えたるあたりなるべし②⑩

汗あえて峠にたてり見はるかす有明の海のいちめんの風ぎ②

(地懐以後)

汗あえて峠に立てば風渡る若葉山ごしに真野の海見ゆ(新萬葉集九)

汗をながして上り来りし峠のうへ清水ながれて村あたたかし③

暑さやうやく今は峠を越えたりと思ふにし涌く淋しさは何①

あてもなくあゆみし道は松山の低き峠にさしかかりたり①

逢坂の峠に見れば瀬戸の海みな美しくし眉と目と肌⑩

あへぎ来てすわる峠の萩原はさかり過ぎたれど見るに飽かぬかも

①

あへぎつつ着きし峠になほ行かむ大鹿の谷を遠く見さくる①

雨すぎた峠のみち熊笹のぬれたるいろのなかに目は笑む②

雨すぎて冷やき峠の道隈^{みち}に赤もといふ高山植物①

雨ながらこれの峠にきたりけりわが村かたは霧ただに白し①

雨やみて蒸せる日中に徳本の峠越え着て桂を掘りぬ③

荒縄にくくりし寒の鯉さげて峠を越ゆるバスに吾がをる

(新萬葉集四)

洗はれし雪のはだへの美しやをとめ峠のふじの夕立①

アリランの唄は峠を越えてゆく君をおもひて想ふるなり⑧

あれこれと似たる峠の霜草も見の飽かずして今日もわが越ゆ

加藤 将之

橋田 東声

土岐 善麿

橋田 東声

小倉 辰彦

土屋 文明

都筑 省吾

岡野 直七郎

與謝野 寛

橋 宗利

加藤 洵綾

横田 専一

片岡 恒信

古泉 千櫨

植松 寿樹

鈴木 藤雄

武島 羽衣

斎藤 茂吉

中西 悟堂

青畑の見ゆる峠のその奥のかすみのなかに山はつづける

(新萬葉集七)

伊賀上野へ芭蕉も越えし峠の下西田君永く消息絶てり(老師) ①

いくたびも驟雨の濡らす十国の峠にをれり月は駄目たらう ⑥

石神を祭る峠路のぼりくれば谿を隔ててほととぎす鳴く ①

石北の峠に近き原始林オホーックより秋風いたる ①

伊豆二月いそわいそわに寄る浪の白きをみつ峠路をゆく

(新萬葉集三)

いづくしく青くさそよぐ峠のみ白き牛ひき人きたる見ゆ

いづこにも我を見つむる山ありてわびしくなりぬ碓氷の峠 ①

いづこより来るも峻しき峠あり山国村といふ名もあはれ ④

伊那谷の馬原山の峠越え下りはさらに険しくおぼゆ ⑬

いにしへの旅を知らざるわが子等は花採り遊ぶ峠の原に ⑤

犬つれて測量技手のぼりゆく峠のうへに雲生々し ③

稲こきて里影淡き稲早やも峠越え来しさを手にしつ

命ありてまたも越えゆく千々岩の峠に紅く照るつつじかな ②

飯盛の峠に暮れてくだる時木立にさわぐ群るる鴉は ⑧

いましがた越えし峠の頂の赤土みちに夕日当れる(新萬葉集九)

うき人が越えて行きたる草山の峠にあたる一つ松見ゆ

碓氷なる峠にいたり王宮の壁に逢ひたり見晴れしの台 ②(心の遠景)

うち越ゆる峠の六本松片枝差しふるき世もここに仰げば近し ③

美しくし山田のよろひのさねほどに狭かり阿予の峠に見れば ②

(岩波文庫)

帆立孝之

印田巨鳥

宮柊二

鈴木光子

井出一太郎

国枝史郎

古泉千樫

近江満子

高安国世

川田順

今井邦子

結城哀草果

本間栄三

高田保馬

松村英一

岡田哲太郎

小杉放庵

與謝野晶子

松本滋代

與謝野晶子

與謝野晶子

うづたかき柿の落葉を踏みてよりのぼる峠に少し息づく ①
うねうねと登る峠の中程でふりかへった眼に碧い湖

馬市に峠を越えて行く人ら馬牽きて幾たりものぼり来るに会ふ ①

馬どちは峠に遭ひて嘶きあへり寂しくあらんあはれ馬どち ①

(新万葉集二)

湖尻へくだる峠はうちひらけ富士の山見ゆすぐそばのこと

(小笹生)

雄勝野の昼鳴る神は国境の峠の雲に鳴り鳴りて行く(互)

落葉して日ざしあかるき峠みち木の間はるかにあをき湖見ゆ

(新万葉集五)

尾根づたひ一筋雲の光れるは峠を越ゆる路にかあらむ ④

大き峠を津軽に越えしばかりにて山の紅葉のひたすら冥し ⑧

大き峠一人越えつつ冒険に似たる心を好みたりしか ②

大きな峠を越えし人々は歩みつかれて休みけむかも ⑩

大空が峠のうへに今崩る白き雨裂く霧のうづまく ⑬

大平の峠に立てば天遠く穂高のすそに雲しづまりぬ ⑩

思満ちてゆきにけむかも峠こえ檜の林にゆるくそふみち ③

箱坂の峠を越えて行く人は如何なる人ぞ日のくれぐれに ⑧

(新萬葉集七)

駕籠二挺たうげにいそぐ夕ぐれを茅はら篠はらあめになりゆく

風強き峠のみにちトラツクのある埃をわれひとり浴ぶ ③

風のむた春蟬のこゑ流れくる青葉の中の昼のたうげ路 ①

山口不二花

花岡謙二

山口茂吉

加納小郭家

岡麓

小杉放庵

田島武夫

坂口貴敏

吉植庄亮

中川與一

斎藤茂吉

與謝野寛

斎藤茂吉

松本滋代

松村英一

金子薫園

長谷川銀作

関得一郎

月山の雪近きこの峠汗たりて少年の茂吉先生行きましにけむ②
 かなかなの声澄みとほる峠路や天城は雲を分けて眞近き(多摩四)
 悲しみて友が越えけむ十国の峠も見たり冬枯のさま①

(現代短歌全集)

礦山へ越ゆる峠の片岡の雑木林はいまだ芽ぶかず①

かにかくに暑さも峠越したらし嬉しくもあるか忍び寄る秋⑥

刈場坂の峠のぼると子を連れて汗流しゆく車前草の道⑧

河梨の峠のうへを飛べるとき機翼かすむる雲にあひたり①

かはるがはる幼き二人おふひつつ登る峠に夏雲雀なく

亀石の峠をこえて風冷ゆる霧の中より警笛ひびく①

カメラ持たぬ者はならび写されて峠上の小憩五分③

狩勝の峠をこめし霧の海の底にほめく十勝国原①

狩勝の峠こゆればみち足らふ山川青し晴れにけるかも⑨

軽便鉄道をバスに乗り継ぎ峠越え雲原村に來たりたりける③

枯れすすき峠の上の晴れたるに風は穂高の雪よりぞ吹く⑪

枯生ふむ峠より西むらさきの富士ただありて黄昏れにけり①

川青く北にながれてをりしかば峠の土になみだこぼれつ

(新萬葉集六)

岸壁の峠越えたり浅間嶺に朝陽沁み射すその陽のあかき

桔梗の花咲く山の峠には身にしむばかり蟲鳴きにけり①

汽車の揺れいちじるくなりぬ国境の峠を越えて下りたるらし⑤

木曾へ越す峠二つのあひだるにて霧のしまきの過ぎゆく迅し⑬

加藤 洵綾

下村 照路

堀内 通孝

大場 寅郎

花田 比露思

松村 英一

藤原 東川

土屋 文明

上代 皓三

相良 義重

武島 羽衣

斎藤 茂吉

植松 寿樹

與謝野 寛

金子 元臣

浜田 盆秀

神保 允子

美禰 国樹

松村 英一

川田 順

木曾山の峠の家にうる酒のつめたき味をかなしとぞ思ふ

汽笛の音の響を聞けば霜夜行く汽車は峠にさしかかるらし

(新萬葉集九)

危篤なる知らせのありて夜半越ゆる峠はしるく馬酔木の匂ふ

木の枝にあたる夕日のさびしらに峠は越えて山恋しけれ

君の妻こよひ峠とききしより夜更けておもふすでにしばしば②

霧積の霧の使と逢ふほどに峠はあきのゆふぐれとなる②(岩波文庫)

桐の花ひそけく咲けるこの道は峠を越して河内へ通ふ②

霧ふりて峠に見るは一行の誰れぞ霧より白き横顔⑬

霧ふれば苗場の山も北海も世に無き如し三国の峠①

霧まへるやせほね峠を下るとき相馬が岳の聳々を見き⑦

(現代短歌大系)

草なびく峠にたてばふた親のまします国の空晴れてをり

(新萬葉集五)

草も木もいろづきあかき塩尻の峠にありて小鳥焼きたり

草山にあかるき峠ここを越えてひそけき谷の路はつづくらむ③

杏掛の峠にいればバックミラーに浅間は遠く引き離されぬ②

国境ふ残雪の山山相かへて古志の景なり峠越ゆけば①

国境ふ峠の原にながくゐつ午過ぎて雲の天覆ひくる③

熊の仔に餅投げやりて紅葉はめて峠の茶屋に一人やすらふ

雲ひくき峠越ゆれば (妹もうとのつめたきなきがほ) 丘と野原

と①

川崎 杜外

小倉 辰彦

浅田 鼓楼

高田 浪吉

平野 宣紀

與謝野 晶子

吉井 勇

與謝野 寛

近江 満子

尾山 篤二郎

所 三男

馬場 静浪

植松 寿樹

清水 恒子

金子 信三郎

佐野 四郎

川田 順

宮沢 賢治

くりからの峠を越せばひらけるふるさとの田畑げんげは咲ける

③

長 沢 美 津

グリムゼルの峠しみにらに秋陽照り幹々の間に見え透く赤松②

朝 吹 磯 子

栗山へ越ゆる峠を我に見すとトラックは登路の雪にスリップす④

山 下 秀 之 助

車来て峠のうへに我れを待つ十和田の水よ今は別れん⑪

與 謝 野 寛

黒百合はともしき花か峠越えの佐々成政のあぶみ憶はず

森 勇

蛍光の誘蛾灯点く早苗田を峠より見つつ園かと疑ふ④(角川文庫)

吉 野 秀 雄

溪に入り霧積の湯にいたるべき朝の峠の雲と思ひぬ(心の遠景)

與 謝 野 晶 子

下駄の齒にはまりし石をとりて居り峠の下に犬の声きこゆ①

中 村 美 穂

高原をなほし行きなばくらかけの峠を越えて飛驒に入るとふ⑩

斎 藤 茂 吉

木かげより青海原のみゆるかなこのたうげにてしばしいこはむ②

明 治 天 皇

子がドライブひた信頼みをれやシンブロン峠の道のいよよ嶮し

朝 吹 磯 子

き②

小鴉は茅がやすれずに飛び交へり海をぞよろふ峠のうへに⑥

斎 藤 茂 吉

苔清水掬びてこゆる峠ゆき松前に至る道は古きかも③

土 屋 文 明

ここ越して下れば阿波の国となる峠の雪にそそぐ雨かな(放庵歌集)

小 杉 放 庵

ここよりは甲斐に入りゆく峠の道うつ木の花今さかりなり

川 端 千 枝

国境の峠越えゆく雲見えて青田涼しく雨晴れにけり

安 井 蔦 子

小鳥籠さげて峠を来し人の汲み上げて水を小鳥に飲ます③

吉 田 正 俊

この谷を山女を釣れど峠こえて価よき村に運び去るとぞ

土 屋 文 明

この峠天へか通ふ見はるかす大跳めに心をどるも②

吉 井 勇

この峠日に幾人が越ゆらむとうぐひすの声を聞きつつおもふ

依 田 秋 圃

木の実食ひに通ひし熊の足跡のありし峠を吾が越えて来つ③

鬼 法 師

小仏のたうげに居ればふりさくる狭間はながし北にむかひて(霜)

斎 藤 茂 吉

駒が嶽諏訪の湖水も編み入れぬ峠のものと落葉松の森②(心の遠景)

與 謝 野 晶 子

さいはての本草羨しび目は向けて峠の原をひとり分けゆく③

佐 野 四 郎

雑木々のしたかげ暗き峠のうへ妻籠の方の登る人なし⑮

松 村 英 一

雑木山樹々の紅葉のいろ寒く朝間の峠しぐれきにけり

小 林 歩 三

坂と言ひ峠といはぬ土佐人らバスの埃をあびて徒ゆく③

相 良 義 重

防人が母父斎ひ越えにける神の御坂の峠よぎりゆく③

森 山 汀 川

昨日の雪いまだ消えねば諏訪の湖いよいよ青し峠の下に

小 林 喬 樹

(新万葉集三)

柵をもて二つに分つ県界を踏みまたぎたり峠のうへに⑦

松 村 英 一

堤げゐたる荷物重たくなりければかつぎて峠越ゆる妻子と⑤

高 田 浪 吉

笹原にのこる斑雪のすがしきを踏みつつあゆむ峠のうへに

橋 本 徳 寿

里の子は菜の花もちてをしへけり行くてに幾重かすむ峠を①

金 子 元 臣

さるをがせ長きを見れば五百重なす山の峠も越えにけらしも⑥

斎 藤 茂 吉

沢の辺に鳴き行く鴨の声近し夜更けて一人峠を越ゆる(新万葉集三)

小 林 喬 樹

塩尻の峠の登りの限ごとに波立つ諏訪の水海展くる④(角川文庫)

吉 野 秀 雄

塩尻の峠のあたりのぼのと夕照る空の大きく明るし(美穂)

豊 島 晃

塩尻の峠のかなた大なる山の世界のあるにおどろく⑪

與 謝 野 寛

鹿狩のはなしも尽きて天城嶺の峠あふげば雲ひとつ飛ぶ①

金 子 元 臣

しかすがに峠の上は老松の梢をすらね風吹き澄みつ④

菊 池 知 勇

しぐれつつ峠を下るこの夕あたたかき酒をした念ふなり①

加 納 小 郭 家

時雨降る峠は草のみじかきにはだへあらはにぬれそぼつ石③

十ヶ国一望にして見はるかす峠に立ちてわれのかそけさ④

しづかなる峠をのぼる汽車にして川のたぎちを見るはかなしき

信濃の空遠澄めりこの峠に鳥の渡りの近きを思ふ③

師の君の来ますむかふと八木山の峠の若葉さみどりのして③

島山の峠はかすけし小木の海真野の入江を両面に見て④

島山を峠となして大海原山もとゆる波もきくがに(平明調)

凍み土のほぐれほぐれにこぼれ松青きをかぎて越えゆく峠①

しめきりて冬の日あつきバスのうち峠にちかくわれは疲れぬ

石楠花の群落つづく峠こえ猶こえゆかむ高山の道(新萬葉集五)

白びその木立がかこむ峠にて霧に青さめし井上君の顔①①

しんとせる夕日の峠けだるさうにきりぎりすが一つ鳴いてゐるば

かり②

新芽だつ峠路にしていたどりを手に手に持てる童等にゆきあふ

(新萬葉集一)

水晶沢へ小径わかるる峠にてバスを下りたり霧たちまよふ②

水晶の枕のごとし峠より俯してわが見る伊豆の狩野川②(岩波文庫)

碓氷なる峠にいたり王宮の壁に逢ひたり見晴しの台②②

数里の溪全く尽きて峠の白樺のひよみ見おろす蒼湖⑦

杉のある家とをしへて見おろすに峠のみなみ谷はあかるし⑫

スコール園忽ちぬけて晴天の峠一気に車駆りゆく②②

炭背負ひハモニカを吹く少年が草もみぢせる峠越えゆく③

小宮 良太郎

松岡 貞総

細井 魚袋

佐野 四郎

柳原 白蓮

吉野 秀雄

尾山 篤二郎

今井 邦子

長谷川 銀作

高安 やす子

松村 英一

藤田 とみ子

石田 美枝

寺沢 亮

與謝野 晶子

與謝野 晶子

與謝野 晶子

佐佐木 信綱

松村 英一

渡辺 信子

結城 哀草果

背丈なす薄ゆり上げて来る風のやむひまもなき峠に立つわれ

(多磨二)

仙水の峠くだりて岩の間にいざよふ水もはやしづかなり①①

早桜田子の峠に咲くならむ一枝かざし下り来る杣あり④(角川文庫)

そこふかき谷見おろして峠ゆく旅いかばかりわびしかるらむ①

纒曳きて吹雪く峠を越えゆく馬あらし息吐きながら①

峠来ぬ柑子供養と云ふやうに与へられたる荷籠と我れ等②②

たうげにはいづる水あり既にして微かなれども分水界をなす⑫

峠の上に腰をおろす平わづかありて雙谷の水はるか聞こゆる①

峠のうへひたにしづもるま昼なか群がり立てる夏枯草の花

(新萬葉集五)

峠より相むかひける山峽にしろき川原ははつかに見えつ⑥

峠よりくだりの径はいくばくも降らぬ時雨にぬれつつつかむ③

峠より見る山すべて沈めども近く歛つ伊豆の東岸⑬

高山のたうげをこえてつくづく杖のちからをおもひしりぬる

(新萬葉集別)

たぎち来る峠の水を注ぎ入れて池に鯉飼ふ馬籠部落は

竹寺に出づる峠は何方ぞ道はくだりて植樹林のなか⑮

忽ちに日の暮るごと霧ふれば峠も溪の底と思ひぬ⑬

達磨嶺の峠間近となりけらし谷啼き亘る群鴉見ゆ(多磨三)

たどりつきし峠のうへに祭る石神あらはにありて装ふものなし⑩

谷底に盛り上る青葉日にいきれ峠旧道をわがくだるなり

今川 正

松村 英一

吉野 秀雄

昭憲 皇太后

大場 寅郎

與謝野 晶子

斎藤 茂吉

加藤 洵綾

高崎 英雄

斎藤 茂吉

小宮 良太郎

與謝野 寛

池辺 義象

佐々木 静

松村 英一

與謝野 寛

坪井 貞

斎藤 茂吉

土屋 文明